

グローバルな時代における生き方

東京大学

前期教養課程

黄 捷琳 (台湾)

21世紀は科学技術の飛躍的な進展により、人・物・資本・情報などの流れが迅速化し流動化するグローバルな時代である。経済・政治・社会・文化の様々な分野にわたり国境を超えて連絡し合い、緊密な相互依存関係に発展していき、人々は急激な変化の渦に巻き込まれていく。

平成24年6月に行われた第2回グローバル人材育成推進会議において、グローバル人材の概念に含まれる要素は「語学力・コミュニケーション能力」、「積極性・協調性」と「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の3つに総括した。

また東京大学の平成24年度の入学式に、濱田純一郎総長は「国際的な流動性など、東大には弱さがある」と指摘した。新入生総代の垣脇宏俊さんは「グローバル化が進む中、タフで世界的視野を持った東大生となるべく、日々の学習で精進していきたい」と宣誓した。

このように「国際的」、「グローバル化」、「留学」、「世界的視野」など、至るところまで現れるキーワードだと言っても過言ではない。短期留学プロジェクトが盛んになり、塾のコースはビジネス英語からキッズ向けの英会話まで多種多様に進化し、企業がいわゆる「グローバル人材」を求め、まるで全国民が今までにないような勢いで「国際化＝世界のペースとの統合」の目標に突進しているようだ。

ではこの空前絶後のグローバルな時代において、我々はどのように生きていけばよいのだろうか？

筆者はこの質問に長い間悩まれ続けてきた。なぜなら、時代の流れに対応する「グローバル人材」の条件がはっきり決まっているものの、それは社会の制約であって個人の希望ではないので、全ての人に当てはまるとは限らない。

地域・国家が提唱するように高く掲げられる大文字の「国際的」ではなく、内面に影響を及ぼす「国際的」の意味を一人ひとりで考えたい。誰も彼もが「世界」へ焦点を当てる時に、トレンドに紛らわされず自分自身に目を向けるべきではないか。

ここで筆者自身の経歴を少し紹介させていただきたい。筆者は台湾生まれで、小学校から両親の仕事の原因で中国の広州へ引っ越し、後上海へ転居し地元の学校に転入した。高校に一年間アメリカに留学し、帰国して蘇州にある台湾人学校に転入した。それから大学では夢が叶い、日本の大学で勉学することができた。

人に自分の経歴を語る度、毎回もれなく「本当に国際的ですね！」というコメントを頂ける。

ここでは決して自満しているのではない。実際「国際的」だと褒められて、戸惑うことが多かった。一体何か「国際的」なのか、国々で生活した経験は自分をどのように磨いたのか、ぼんやりとしていた。大事なのは「国際的」、この言葉の後ろに隠される意味は何なのかを考えることである。

筆者は色々な尺度から考え、留学経験のない人と比較して自分が少し優れている素質は「語学力」、「外国に関する知識」と「理解力・包容力」だとまとめられた。面白いことにグローバル人材育成推進会議で論じたグローバル人材の要素とほぼ対応できたが、これらのファクターを更に討論していかなければならない。

まずは「語学力」である。普通に考えて「人材」に必要なこの語学力でも、実は「国際的」の概念の核心にはないと気づいたのである。考えてみよう：英語能力が非常に優れた人がいるとする。でもこのような人をあなたは「国際的」だと思うのだろうか？多分違うだろう。確かに語学力はすごいが、国際的とはスレがある。

我々はなぜ英語を勉強するのだろうか？社会に必要とされているから？それは外因として成り立つかもしれないが、自分の内面にモチベーションがないことになってしまう。英語を勉強する理由はいかにも簡単で、英語を使い外国人の方とおしゃべりを楽しみたい、自分で旅したいなど、言葉の真価は使うことによって初めて発揮すると言えよう。外国語を通してその文化を知り、外国に関する経験を積むことこそが国際的に繋がるのは明らかである。

次は「外国に関する知識」である。実際語学力はこのファクターに導くツールにすぎないため、筆者の中では外国に関する知識が「国際的」になる一番の基礎である。

新聞やニュースでも毎日世界中の出来事が報道されるにもかかわらずニュースだけではその国の事情を身近に感じられない。国のイメージは実際非常にぼやけていてピンと来ない。

例えば2013年9月30日の国際ニュースに「イラク北部で爆弾テロ シリアの戦闘波及か」や「ユニクロ 上海に世界最大の店舗」といった内容があった。それでもイラク、シリア、中国に関してどう思うかと聞かれると客観的な事実の羅列しか言えないだろう。

これを人に例えるとわかりやすいだろう。あなたはある人のプロフィールを見た（＝ある国に関する情報をたくさん知った）。でもあなたは未だこの人を知らないし、特になんとも思わない。これは単なる知識の積み重ねに留まり、感情を喚起していないからだ。

「国際的」になるにはまず「知ること」から始まり、それから親近感や憧れを持つこともあれば嫌悪感を抱くこともある。これは「グローバル人材」の要素とは程遠いかもしれないが、我々は人間であり、感情は主観的で正解もない。自分の心に耳を傾けなければ自分が納得できる決断ができない。

ある国を本当の意味で知るためにはやはり実際にそこで生活するしかないだろう。メディアの望遠鏡から見るのは無論代表性のある集団行動だが、その中の一人ひとりをきちんと見ることができな。しかし我々は生きていく中付き合う相手は「集団」ではなく「個人」だということを忘れてはいけない。筆者の経験から言うと、一度外国に行ってその空気を吸いながら日々を過ごさないと手に入らない物はある。

が、留学には時間もお金も必要なため、誰もが行けるものではない。代わりに周りの外国人と交流し、「人」の口からその国のことを聞くのが勧められる。違いを知るのみならず、もっと大切なのは人間としての「共通点」を知ることだ。我々は知らないから誤解する。知らないから他人を簡単に否定することができる。

外国のことを知ることはその無知の壁をぶち壊す第一歩だ。例えその国を「好き」にならなくても、ある程度の知識は今後の判断のベースとなり、関心を持ち始め接触していく契機ともなる。「全く知らない」と「少し知っている」の間の違いは人の発想を逆転できるように大きい。

外国に関する知識を備えてから、「理解力・包容力」を育てることができる。

一言でまとめると文化の違いに面する時に理解し受け入れようとする姿勢をとることである。即ち自己中心的な考えをあきらめて、相手は自分と敵対的に思うのではなく仲間として共感して、調和して共に生きていくことだろう。

また筆者のことだが、高校三年生に転入した台湾人学校では、多くの学生は長年中国に住んでいるにもかかわらず、中国且つ中国人にさほどポジティブな感情を持たなかった。これは台湾のメディアでは中国は未開化であるニュアンスが含まれるメッセージが多く見られるためだろう。確かに台湾本土でも中国を「好む」人はそれほど多数ではない（比べて日本や韓国は好感度が高い）。しかし在中台湾人がそういった偏見にとらわれて周りの環境をきちんと見ることができなくなったのはとても残念で悲しいのである。

筆者も上海に転居したばかりの時正直言ってその場所が大嫌いだった。人が違う。習慣が違う。不慣れに苦しんでいた。しかし時間が経つにつれて筆者がその町が好きになった。文化は違うけれど面白い。台湾人だからそれを利用していつも話題が尽くことが心配いらなかった。「中国人」ではなく、筆者には様々な中国人の知り合いができ、学業でお互いを励む心の温かい友達がたくさんできた。

外国に住んでいる時、差異を一々気になってイライラする生き方がある。それと真逆に、違いを受け入れて新しい物を楽しむ生き方もある。同じく暮らすなら無論楽しく生活したいだろう。それには理解力と包容力が必要なのだ。

グローバルなこの時代の中に、「国際的」にならなければならないかと聞かれると、そうではない。

英語が話せなくても、世界トップ 500 の企業に入らなくても、太平洋の向こう側に何が起きているのか関係なく普通に仕事し、同僚や友達と遊んではしゃいて、普通に家庭を築いて、これも一種の幸せである。人にはそれぞれの生き方があり、ここでは決してそれに優劣をつけるつもりはない。

しかし加速して変化していく世界に、自分が少し変わろうとしないと苦しくなることがある。でも社会が「国際的」な要素を求めるからそのためにあくせくと働くのではなく、自ら「外国に関しての知識」と「理解力・包容力」を追求するのだ。

情報の流通が利便になった今、外国のことを知るにはワンクリックしか要らない。異文化を探求する単純な楽しさ、世界を知ってそれを自分の多様性に変えていく喜び、毎日の営みに専念すればいいと主張する方々、それに触れてみてはいかがだろうか？

そして知ることによって生まれる理解力と包容力は人々の生活をより良い方向に持っていく。今のクラスや職場に外国人がいなくても、価値観が違ってまるで異文化のように理解できない人はいるだろう。その違いを包容し、お互いが共存できるような環境を作るためあなたが心の鎖を解けば、あなたが相手を見る目が変われば、相手も変わってくるに違いない。

このグローバルな時代に、うまく生きていこう。終点は「グローバル化」でも「世界的視野」でもなく、ご自分の「幸せ」である。

参考文献

「第2回グローバル人材育成推進会議（平成24年6月4日）資料3」

『東京大学新聞』平成24年4月16日「3153人が東大生に 入学式 総長『東大の弱さ認識を』」

『グローバル化とアジア社会』2006年 新津晃一,吉原直樹編 東信堂 p.6-19